特定非営利活動法人 TMAT（徳洲会医療救援隊）ニュース

HEADLINE

TMAT ニュース第７号発行のご挨拶 …… 1
ハイチ共和国、チリ共和国、中国青海省で発生した地震に対する TMAT の活動 …… 1
TMAT ハイチ大地震災害救援活動に参加して …… 1
TMAT ハイチ大地震災害救援活動報告 …… 1
TMAT のハイチ支援活動に感謝状 …… 2
ハイチ第一陣隊長として …… 2
青海省先遣隊長として …… 2
被災地で聴いた歌声 …… 2
災害医療活動を経験して …… 2
食事の大切さを実感した被災地での活動 …… 2
ハイチ震災応援レポート …… 2
チリ地震の派遣に際して …… 3
チリ地震 TMAT 活動略歴 …… 3
チリ大地震医療救援隊に参加して …… 3
通訳としての思い出 …… 3
中国青海省地震 TMAT 活動略歴 …… 3
第１回世界災害看護学会で TMAT が活動を報告 …… 4
“ドライブスルー方式を取り入れた災害シュミレーション“ Q&A …… 4
エキスパートナース誌で TMAT のハイチ活動レポート …… 4
賛同者の声 …… 4
TMAT 支援ハイチチャリティーコンサートで募金活動展開 …… 4
第５期終了のご挨拶 …… 4
事務局だより …… 4
災害救護・国際協力ベーシックコース受講者募集 …… 4
会員募集と寄付金のお願い …… 4

第7号 2010年（平成22年）9月30日発行：特定非営利活動法人 TMAT　〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-6-8 ダイニチ麹町ビル 2F
電話：03-3263-8136 FAX：03-5214-6664 ホームページ：http://www.tmat.or.jp E-mail：info@tmat.or.jp 担当 森 孝（編集長・TMAT理事）

TMATニュース　第７号発行のご挨拶

９月を迎え皆様にはご多忙のことと存じます。日頃は格別のご理解、ご支援を賜り有難うございます。NPO 法人 TMAT（徳洲会医療救援隊）は皆様の多大なるご支持によりこの 10 年間で前身の TDMAT 時代を含め 18 回（うち海外１１回）の災害緊急医療救援活動や医療技術支援を行ってきました。
今年に入りハイチには 33 名、チリには９名の TMAT 隊員を派遣することが出来ました。正に災害は何時発生するかも分かりません。私どもTMATは不時の災害に備え人材の育成（災害救援講習会開催）や各地の防災訓練への参加、大使館・国際機関訪問による国際関係の構築など地道な活動を続けてまいります。
これからも「生命だけは平等だ」の理念・哲学のもとに国内外の災害に備え、迅速な活動が出来るよう講習会や情報収集に引続き努めて参る所存です。
尚 これらの活動は皆様からの年会費と募金に支えられております。どうか上記の趣旨に引続きご理解、ご賛同賜りますようお願い申し挙げます。

徳田　哲　NPO 法人 TMAT 理事長

日頃よりＮＰＯ法人 TMAT の災害医療活動、医療支援活動、国際協力活動をご支援いただき、誠に有難うございます。おかげさまで活動範囲はアジアからさらに中南米へと広がり、ハイチ、チリには４２名の隊員を派遣することが出来ました。
TMAT はこれまで様々な地震や津波、水害で被災した地域に医療チームを派遣してまいりました。参加した隊員は延べ４５０名を超えております（TMAT の前身 TDMAT での派遣を含む）。また、災害医療における基礎を学ぶ災害救護・国際協力ベーシックコースを２０回開催し４５０名を超えるプロバイダーを輩出してまいりました。同アドバンスコースも２回開催され、全国に人材が育ってきております。今後も「生命だけは平等だ」の理念・哲学をご理解いただき、TMAT がさらに成長し、皆様のご期待にお応えすることが出来ますようにご支援をお願いいたします。
なお ＴＭＡＴの活動は個人会員各位と団体会員からの年会費と募金に支えられております、皆様のご理解、ご協力を重ねてお願い申し上げます。

福島　安義　NPO 法人 TMAT 副理事長

ハイチ共和国、チリ共和国、中国青海省で発生した地震に対するTMATの活動

平成 22 年に入り、世界各地で大規模災害が発生している。１月にはハイチ共和国にて、２月にはチリ共和国にて、４月には中国青海省にてそれぞれ地震被害があった。それに対し、TMATは多くの隊員を派遣。派遣されたスタッフは皆医療関係従事者であるものの、その職種は様々である。ここではそれぞれの災害に派遣された隊員の各々の思いを綴ってもらった。

片足切断となったが、いつも明るい笑顔で接してくれた少女

ハイチ地震 TMAT 活動略歴

1月12日	午後4時53分 (日本時間13日午前6時53分) カリブ海の島国ハイチ共和国でマグニチュード (M)7・0 の地震があり、国内では大きな人的、物的被害が出ていると報じられた。（日付は日本時間 現地の時差 －14 時間）
1月13日	TMAT 事務局で情報収集活動開始
1月14日	先遣隊（現地被害状況を調査するチーム）派遣決定。ドミニカ共和国サントドミンゴへむけ成田を出発。
1月15日	先遣隊現地到着。医療チーム活動拠点調査の為、ハイチ共和国国境近くにあるドミニカの町、ヒマニへ。
1月16日	TMAT 本部、先遣隊からの情報を受け、緊急災害医療チーム本隊の派遣決定。
1月17日	先遣隊ハイチ、ポルトープランスに入国 現地空港及び空港近くにある病院視察。
1月18日	先遣隊と第１陣合流。
1月19日	ヒマニにあるブエンサンマリカーノ病院にて診療開始。
1月20日	第２陣派遣決定（11 名）調査チームはポルトープランスへ行き、同地での医療活動が可能と判断した。
1月21日	第１陣がポルトープランスに入る。11:00 第２陣成田発。
1月22日	第２陣ポルトープランスに到着。第１陣と合流。第１陣 ハイチアンコミュニティー病院にて医療活動開始。
1月23日	先遣隊隊長帰国。第１陣及び先遣隊隊員、第２陣へ引継ぎを行う。帰国の為移動開始。第２陣診療開始。
1月25日	第３陣が結成され、11:00 ポルトープランスに向け成田を出発。
1月26日	第３陣ポルトープランスに到着
1月27日	第２陣帰国の為移動開始。第３陣診療開始。3 陣隊長と事務局で意見交換をし、現地の状況が改善し始めたと判断し、２月３日の第３陣帰国をもって活動を終了する旨決定した。
1月31日	第３陣帰国の為移動開始。
2月 3日	第3陣 日本に帰国し、今回の緊急医療支援活動終了。

ハイチ地震 対応人員 先遣隊

橋爪　慶人	先遣隊隊長・医師
萩原　幹朗	事務 国際担当
第１陣	
田川　豊秋	隊長・医師
清水　一起	副隊長・医師
當麻　俊彦	医師
瀬戸美佐子	看護師
中村　幸司	看護師
浅草規久治	看護師
横地　貴司	薬剤師
貴島　幹三	管理栄養士
迫田　直治	事務職
吉松　栄作	事務職
川井　聡	記者・カメラマン
第２陣	
清水　徹郎	隊長・医師
小野　隆司	医師
高力　俊策	医師
渡慶次賀博	医師
荒尾　修平	看護師
酒井　唯	看護師
佐藤　哲也	看護師
佐藤　晴彦	薬剤師
鑓水　弘樹	管理栄養士
加藤　浩司	事務職
上原　仁	事務職
第３陣	
原野　和芳	隊長・医師
河内　順	医師
池原　康一	医師
樋口　慎一	医師
岩村　知樹	看護師
長岡　信	看護師
松本　学	調理師
眞玉橋顕一	事務職
佐藤　昌則	事務職
佐藤　晴彦	薬剤部
（第２陣より継続）	
事務局	
宮坂　善之	薬剤師
野口　幸洋	管理栄養士

TMATハイチ大地震災害救援活動に参加して

原野 和芳（ハイチ第三陣隊長、TMAT監事、医師）

平成22年1月13日にハイチ大地震の連絡を受け、14日に徳田理事長に許可を取得、橋爪先生を先遣隊隊長としてＴＭＡＴの活動が開始された。今ミッションにおいて特筆されるべきことは①アジアではなく日本から地球の裏側にある遠い国②ＴＭＡＴ及び徳洲会において何の関わりもない国、③被災前より犯罪が多発しており、世界食糧計画の援助物資を輸送していたトラックが襲われ、職員３名全て殺害されるという治安の悪い地域である、という３つの課題を抱えての派遣となった。１月14～24日まで本部責任者として派遣メンバーの人選と派遣元病院の調整を行っていたが、報道機関から出てくる状況は必ずしも現地入りした仲間を安心して見守れる環境ではなかったこともあり、派遣の度に誰を送るかということは難航した。遠距離でもあり、全日空、コンチネンタルをはじめ企業からの温かい支援もあったが運営費もかさみ財政的にも苦しい状況があった。福島ＴＭＡＴ副理事長とも協議し、被災状況と活動評価および期間についての検討も含め、25日に隊長として自ら現地に赴くこととした。１／２陣の築き上げた信頼関係のお蔭で３陣は最初から米国、カナダ、スウェーデンなどの諸外国の医療者から問題なく受け入れられた（感謝）。
三陣の構成に外科医、形成外科医、麻酔科医、手術室看護師が含まれており、最初から手術室を任されることになり、幸いにもその期待に十二分に応えることが出来た。三陣が到着した後、ハンガリー、韓国など幾つかのチームの撤収、病院の敷地内に寝泊まりしていた被災者数の減少、疾患内容の慢性期への移行、病院の日常診療の再開などを確認し、災害急性期が終わりつつあることを確信した。二月三日帰国、撤収時の活動内容を確認したところ、診療数551人（病院前トリアージ含まず）、手術関連数15例といった実績を残すこととなり、日本人が中心になり活動した救援活動では日本最大となった。
この数字は関係各機関に改めてＴＭＡＴの実力を示すこととなり、自身としても徳洲会の医療の質の高さとＴＭＡＴトレーニングの効果を実証した。日常診療の大変な中、病院より貴重な職員の派遣に気持ち良く応じて戴いた四役、同僚の方には心より深謝いたします。

頭部を負傷した子供を治療する第３陣チーム (ハイチ地震)

TMATハイチ大地震災害救援活動報告

橋爪 慶人（ハイチ先遣隊隊長、TMAT理事、弘生会病院病院長）

日本時間２０１０年１月13日６時53分に、ハイチ共和国で地震が発生した。地震規模はＭ７・０であったが、震源が人口三百万人の首都ポルトプランセから西南西15Ｋｍ深さ10Ｋｍと近く、また耐震が不十分なコンクリート製の建物が多いなどから死者が20万人に及ぶ大災害となった。ＴＭＡＴでは地震発生直後から情報収集を始め、14日の午前中には徳田理事長に地震の概要を報告、支援必要性を上申、その場でその日のうちに私が派遣されることとなった。
今回の活動はいろいろな意味でこれまでのＴＭＡＴの活動を超えるものであった。一番目は治安、震災前からＰＫＯが常駐し治安維持にあたっている国であり、二番目は地球の裏側に達する時差が14時間という遠方ということ、これらは安全確保の難しさやロジスティックをどのように展開するのかという問題につながった。そのような条件が重なる中で、ポルトプランセの空港が閉鎖されていたこともあり、まずは隣国のドミニカ共和国に入り、そのまま治安状態などの情報を入れながら陸路被災地のポルトプランセに向かうというルートを選択した。つまり、安全がある程度確保されている地域から徐々に危険性が高い被災地に向かい、安全性と被災者の状況を照らし合わせながら活動場所を確保することにしたわけである。
実際の先遣隊としての活動は、ドミニカ共和国の国境の町ヒマニで被災者が多数運ばれていることを確認、まずはここでの活動が可能と判断し本隊の派遣を要請、本隊が到着するまでの時間を利用して、ポルトプランセに入り情報収集を行い、本隊到着後に再度隊長の田川先生とともに入り、国連のＯＣＨＡの協力を得て宿営地ならびにポルトプランセでの活動場所を確保、その後の被災地のど真ん中での活動へとつながった。
その後の活動の詳細は、ＴＭＡＴならびに徳洲会のホームページを見ていただくとして、先遣隊を含め計４チーム33名の隊員を派遣、２か所の病院で合計551名、手術関連15例という活動につながりました。今回も、派遣隊員ならびに派遣中の支援、また本部運営はじめ全面的な支援を頂いた徳洲会グループならびに隊員や物資の輸送に協力頂いた全日空、コンチネンタル航空、その他医療支援をいただいた多くの企業に感謝するとともに、今後も引き続きＴＭＡＴの活動を支援いただけますようお願い申し上げます。

周囲全体が崩壊した路地 (ハイチ地震)

“ドライブスルー方式を取り入れた災害シミュレーション” Q & A

TMAT ニュース６号で四街道徳洲会病院、荒尾修平看護師が執筆した “ドライブスルー方式を取り入れた災害シミュレーション” について、読者から具体的な訓練の実施に関した質問が寄せられたので、筆者に質問へ答えてもらった。

Q1：パンデミック訓練では各担当の迅速な対応が求められますが、いかにして迅速に患者様の会計処理を済ませ、薬剤を処方したのですか？

A1：お薬を各患者の症状に合わせて適量を出すのではなく、事前に定額のお薬セットを数セットのみ準備しておいて、来院する患者の症状の度合いに合わせて、より適当なセットをお渡しし、定額の料金を受け取るといった形をとりました。こうすることによって、通常時間のかかる薬剤の処方、会計処理手続きを短縮することができました。

Q2：新型インフルエンザへの対応として、医療従事者の感染を防ぐことが大事な点だと思われますが、その点はどういった対策がなされたのですか？

A2：医療従事者と患者が出来る限り接触しないように、患者さんとのコミュニケーションは極力看板や書面でとるようにしました。警備係りの警備棒には大きな表示をつけ、会話をせずに患者さんを誘導できるようにし、症状の説明も詳細を書いた文書を渡して行いました。また、車での来院者に関しては、車から降ろさずに問診、簡易診察を行い、入院が必要と判断した場合のみ車から降ろし、再診察するようにしました。

今年も11月の初旬に四街道徳洲会病院にて災害シミュレーション訓練を行う予定です。皆様ご協力のほどよろしくお願いいたします。

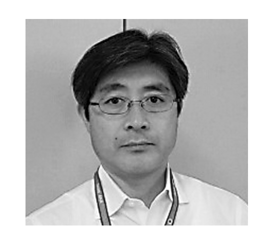
第１回世界災害看護学会でＴＭＡＴが活動を報告

１月９～10日、日本災害看護学会主催の「第１回世界災害看護学会」が神戸国際会議場で開催された。メインテーマは「災害がつなぐ地球人の絆」
国内外から500人以上が集まる中、ＴＭＡＴを代表して四街道徳洲会病院（千葉県）の瀬戸美佐子看護部長と荒尾修平看護主任が参加した。
同学会の目的は、災害時における人々の生活と健康に寄与するために、知識や情報の共有化を図り、看護ケアのグローバル化に向けた検討を行うこと。講演やパネルディスカッション、各国の実情報告、ポスターセッションなど多くの発表があった。
瀬戸看護部長と荒尾看護主任はポスターセッションでＴＭＡＴの活動を報告。閲覧者からは実際の災害派遣時の体験に関心の高さがうかがえた。荒尾看護主任は「自然災害のみならず、地域紛争や複合型災害、地雷に関する活動報告など、世界中で様々な災害が続いていることを改めて思い知らされました。阪神・淡路大震災から15年と言う節目の年に、神戸で第１回が開催されたことは有意義であったと思います。今学会を通してＴＭＡＴの認知度が少しでも上がってくれることを期待しています。」と語った。

賛同者の声

本多 英司　エーザイ株式会社 常務執行役 日本事業担当

忘れもしません２００４年２月26日。スマトラ島沖地震が発生し、私は翌日にジャカルタに飛び、涙を流す現地社員と生活支援物資を詰めた５０００個のダンボール箱を徹夜で作っていました。現地のある日系企業駐在員はこのような危機的状況でゴルフをしていた人もいたようです。なんと情けない人たちか、怒りを覚えたのは人として当然でした。
当社は「患者様のベネフィットを第一義に」というヒューマン・ヘルスケア（ｈｈｃ）という理念を世界で初めて社の定款に入れております。企業として、ついつい売上や利益に目が奪われることもありますが、それは「理念（目的）を実現した後のあくまで結果である」と、ことある度に肝に銘じております。ある時ＴＭＡＴ様の活動を知り、大変な感動と共感を持たせて頂きました。我々より、もっと、もっと凄い人たちがいることを知りました。我々ももっと頑張らなくてはと焦りさえ感じました。弊社による貢献は微力ですが、今後ともＴＭＡＴ様の活動に精一杯お役に立ちたい。そして、苦しんでおられる患者様に心底貢献したい。ＴＭＡＴ様のますますのご発展を心より祈念申し上げます。



小林 義己　ANA総務部

ANAは航空会社ならではの特徴を生かした災害支援を行うことを旨としています。
具体的には、航空機を活用し、医療物資／医療従事者の方々を現地まで迅速にお運びすることです。
ＴＭＡＴさんの迅速な支援開始の障害にならないよう、出来る限りスピーディーな意志決定を行うように心がけています。また、ＴＭＡＴさんの活動理念に賛同している弊社が、災害を受けた方々への支援をお手伝いできることは大きな喜びであると同時に、社内でＴＭＡＴさんの活動の支援に携わった社員は、社会貢献のお手伝いが出来たという満足感、使命感、達成感が芽生え、自分の会社及び業務への誇りが感じられるという副次的効果も発生しました。
これからもＴＭＡＴさんの支援活動に、航空会社ならではの特徴を生かした支援を行っていきたいと考えています。

エキスパートナース誌でＴＭＡＴのハイチ活動レポート

ナース最大誌のエキスパートナース5月号のスペシャルレポートでハイチ派遣第３陣の長岡信看護師（鎌ヶ谷総合病院救急部副部長、臨床工学士）が活動報告を寄稿した。長岡氏は「今そこで起きている災害」とのタイトルで次のように報告した。
被災地では主に現地病院のハイチアンコミュニティーホスピタルと提携した。そこではアメリカやカナダの医療機関から派遣したチームも活動、私たちも「救急患者の診療」「重症患者の手術」など高度な医療支援を展開した。その間にも多くのトラックやコンテナ車が荷台に何人もの被災者を乗せて到着した。病院前は治療を待つ患者で長打の列と悠長なことは言っておれない状況だった。「提供したい医療が出来ない」「救える命が救えない」誠にもどかしい災害現場である。しかし自分で考え助けるために全精力を注ぐことは周囲やチームにポジティブな影響を与える。やはり「なんとかしたい」と強く思う〈やる気〉が大切だ。更に言語・文化の異なる被災地でも笑顔や手を差し伸べるコミュニケーションを技術としている看護師の献身的な活動は世界共通であり今回も多くの絶望的表情の患者に笑顔を取り戻すことが出来た。これこそ災害救急医療の原点であろう。

第５期終了のご挨拶

ＮＰＯ法人ＴＭＡＴの第５期会計年度（平成21年７月～22年６月）が終了いたしました。第５期は３回も大きな災害が発生した激動の年でしたが、無事終えることができたのも、ひとえに、普段からＴＭＡＴのことを応援していただいている皆様のおかげです。誠にありがとうございます。
第５期終了に伴い、７月31日に理事会を開催し、第５期の活動と収支の報告及び次年度の事業計画の承認をいただきました。また、９月25日（土）には社員総会を開催する予定です。
第５期は１月にハイチ地震（先遣隊、本隊１～３陣）、２月にチリ地震（本隊１陣）、４月に中国青海省地震（先遣隊）と立て続けに発生した大規模地震に対し、規模に応じて調査活動を行う先遣隊と実際に医療活動に当たる本隊を派遣し、９００名以上の現地の被災者を診療しました。
研修は、災害時のＴＭＡＴ派遣スタッフとして選ばれるのに受講必須である国際協力・災害救護ベーシックコースを４回実施。インフルエンザの爆発的な流行を想定した災害シミュレーションの訓練も実施しました。広報活動としては、派遣チームの帰国後に活動報告会を開き、また海外を含めた災害に関連したあらゆる学会の場でＴＭＡＴの活動を発表しました。その他にはＴＭＡＴニュースを一回発行、年会費納入の依頼書配布、災害発生時には、派遣までにはいたらなかった数多くの被災状況調査活動を行う等多岐にわたる活動をいたしました。
第６期も災害発生時の医療活動に貢献できるよう精一杯努力して参りますので、皆様も引続きＴＭＡＴ会員として私どもの活動を支えてくださいますよう心よりお願い申し上げます。

TMAT 支援ハイチチャリティーコンサートで募金活動展開

松戸市を拠点とする沖縄民謡バンド「チャンプラーズ」は去る６月５日（土）松戸市商工会議所の後援を受けJR松戸駅西口にてＴＭＡＴ支援のハイチチャリティーコンサートを開催しました。このコンサートには他に沖縄太鼓舞踊「若風エーサー隊」や若手シンガー等計５組が熱演しました。当日は天候に恵まれ、13時～17時の公演中４回の幕間でＴＭＡＴ事務局猪俣コーディネーター、四街道徳洲会病院椎名看護師、ＴＭＡＴ森理事が壇上から参会者に熱心に支援を呼びかけました。
又公演中は写真パネルを花壇や手すりに展示、ボランティアが募金箱を手にしつつＴＭＡＴのパンフレットを配布し雰囲気を盛り上げました。
今回の活動は「チャンプラーズ」にシンガーとして参加している徳洲会グループ千葉西総合病院の小野寺職員や後援者の嘉数職員から支援の申し出が有り、ＴＭＡＴとしては新しい募金活動の試みとして参加をお受けしました。
今回の活動で募金総額は４４，８３５円に達しました。この浄財はＴＭＡＴの今回のハイチ、チリ、中国・青海省地震の派遣費用の一部に充当させていただきます。
なお「チャンプラーズ」は既にCDアルバムを２枚リリースしている人気バンドで台湾とも関係が深く台湾最大のロックフェスＨＯＨＡＩＹＡＮ海洋音楽祭07で参加18万人の聴衆を魅了した実績を持っています。ＴＭＡＴとしては今後も「チャンプラーズ」との連携の機会を持つ予定です。

事務局だより

本号では頻発する世界の大災害に対する TMAT の積極的な活動を派遣隊員の目を通してお伝しております。さてこうした活動の中で事務局も大きな動きがありました。昨年末から事務局員が不在の状況でしたが４月初旬に新人のコーディネーターとして猪俣森太郎君が入職しました。彼は 1984 年生まれ。福岡の高校を卒業後すぐ渡米、2007 年ニューヨーク州立大学ビンガムトン校を卒業しました。その後、社団法人 国際交流サービス協会に所属し、二年間パキスタンにて勤務し、縁あって今般 TMAT に採用されました。高校時代から国際緊急援助活動に関心を持っていたとのことです。事務局を支える大黒柱となってくれる事を期待しています。

災害救護・国際協力ベーシックコース受講者募集 !!

ベーシックコースとは…

災害救護と国際協力に携わる人材を育成する基礎コース。病院からの開催希望を受け、病院と TMAT が協力して運営を行います。災害地で医療活動を行うための基礎知識と災害時の備えを学ぶ講習です。災害時にＴＭＡＴ隊員として派遣されるメンバーはこのコースの受講者の中から選ばれます。
対 象：TMAT 正会員 全職種　※TMAT に未加入の方はご入会ください。
正会員年会費は 10,000 円です（コース当日入会可）
参加費：25,000 円（資料代・記念品費含む）　定 員：25 名
近日開催予定のベーシックコースのご案内
「第 21 回 災害救護・国際協力ベーシックコース」
会 場：出雲徳洲会病院　日 時：平成 22 年 10 月 23 日 (土)、24 日 (日)
申し込み締め切り：平成 22 年 10 月 9 日 (土)
「第 22 回 災害救護・国際協力ベーシックコース」　会 場：榛原総合病院
日 時：平成 22 年 11 月 13 日 (土)、14 日 (日)
申し込み締め切り：平成 22 年 10 月 30 日 (土)

会員募集と寄付金のお願い

TMAT は今年、平成 22 年に入り、短期間の内に何度も医療チームを被災地に派遣いたしました。
私どもの活動は皆様のご支援をもとに成り立っております。
ご協力のほど、よろしくお願いいたします。
正会員費 年会費：¥10,000 円
賛助会員 個人 年会費：¥ 2,000 円 / 口
団体 年会費：¥30,000 円 / 口
＊ 正会員は総会に参加できます。
＊ 会員になると TMAT ニュースが送付されます。
会員会費及び寄付金は次の振込先にお願いいたします。
振込先 郵便振替口座：00170-4-564249
加入者名：特定非営利活動法人ＴＭＡＴ

TMAT ニュース 印刷 アド富士株式会社
印刷のご用命は TEL 045-326-3557 FAX 045-326-3558
〒220-0004 横浜市西区北幸 2–10–33 マニュライフプレイス横浜 4F

TMATのハイチ支援活動に感謝状

3月27日に幕張メッセ国際会議場（千葉県）で開催された徳洲会グループ医療経営セミナーの懇親会の席上、ハイチ共和国のジャン・クロード・ボード駐日臨時代理大使から、NPO法人TMATのハイチにおける医療支援活動に対し感謝状が送られた。

クロード・ボード臨時大使は「ハイチ大地震の被害者に対し名誉ある医療活動をされたことはTMATの国際協力と言う長い歴史の1ページに刻まれるでしょう。ハイチ国民を代表して支援いただいたこと御礼申し上げます有難うございました。」と挨拶。これに先立つセミナーでも登壇し、TMATの医療支援活動に謝意を表するとともに「ハイチへ人道支援をしてくださった徳田虎雄理事長には心から感謝します。」と話した。

TMATを代表して徳田哲理事長（徳洲会副理事長）は「TMATがハイチで活動できたのは、日本に残った徳洲会グループの全員が全国の施設を支えていただいたからです。何処でも、誰でもが最善の医療を受けられるような社会にしたいという思いを世界の国々に届けるためには、TMATのような組織がその一翼を担う必要があると考えております。これからもTMATを支援していただきながら、皆で世界へ最善の医療を届けられるグループにしていきたいと思います。

感謝状を受け取る徳田哲理事長とクロード・ボード臨時代理大使

被災地で聴いた歌声

横地　貴司
（ハイチ第1陣隊員 東京西徳洲会病院、薬剤師）

今回の派遣では様々なことがすべて印象深く残っていますが、その中の一つがドミニカ共和国のサンマリカーナ病院で当直をしたときのことです。

ハイチで情報収集を行う田川隊長を含めたメンバー、前日に当直を行ったメンバーといくつかのグループに分かれて行動したその日、夜の当直を行うため、清水医師、浅草看護師と私は私は処置ができない患者の受け入れを可能な限りしていこうと思いつつも試みきれない不安でいっぱいでした。

特に夜も更けてくる頃、映画で見てきたような非現実的な光景、初めての災害地の派遣、これからの行動など色々な思いが浮かび、不安や寂しさを感じていました。当然被災者の方々の不安はもっと大きいものと思います。

そんな中、ふと歌声が聞こえてきました。見てみるとボランティアスタッフと思われる黒人女性が被災者を励ますように歌っていました。その声で重苦しいその場の空気が徐々に変わり、笑顔になる人、一緒に歌を歌う人など明るい雰囲気になっていきました。その歌は被災者だけでなく、私の気持ちも軽くしました。どの国の歌かは不明ですが、他の医療スタッフの気持ちも軽くしたに違いないと思います。そして、被災地では医療技術は当然必要で大切ですが、それだけではないのだなと実感しました。

田川豊秋（ハイチ第1陣隊長、中国青海省先遣隊隊長、東大城クリニック院長）

ハイチ第一陣隊長として

先遣隊が地元コーディネーターや交通機関、ベース宿泊施設を望む以上に準備してくださっていたおかげで、何の不自由なく活動を開始することができた。懸念材料は医療支援活動のカウンターパートをいかに見つけるかであった。これも、幸運の連続とスタッフの熱意とで何とか形にすることができた。まずドミニカ・ヒトミでのIMAとの出会い。先遣隊がコンタクトを取っていた病院は短期間で情勢が変化、ニーズが少なくなっていた。

この時「整形外科医と薬剤師」を求めていたIMAのチームと共同で他施設で活動ができるようになり、当日から手術を任せていただけることとなった。

そのIMAのチームが大幅に増員されることとなり、折角確保した活動場所を離れ、全く目処のないハイチへ赴くことに同意し、協力してくれたスタッフの協力の下、飛び込だOCHAで活動場所の提供依頼を受けた。ポルトープランスではなかなか得られがたいと思われる宿泊地と活動病院が彼らの紹介で得られ、ハイチ国内でのその後約2週間にわたる医療行為を始めることができた。第一陣の隊員に満足のいく医療行為を行う場を提供できたかというと、隊長として失格だと思うが、その状況において献身的に活動していただいた隊員に感謝している。

トリアージを行う隊員と大勢の被災者

青海省先遣隊長として

2008年の四川大地震時の経験からも、中国国内で医療支援活動を展開することは困難であることが予想された。ましてや今回の被災地は政治的にもデリケートな場所である。高地にあるといった地理的な問題もある。西寧の現地コーディネーターから得られた情報もこれを裏付けるものであった。それでも思い訪問した赤十字病院では、看護師の責任者や院長から詳細な状況の提供を受けたが、被災者を抱える病棟も混乱は感じられなかった。少しでも現地に近い所と訪れた、共和という都市にある病院も落ち着いており、現地には日本では考えられない規模の医療従事者を派遣していると言う説明を受けた。公的機関ではない我々（しかも初めて訪問する海外の医療支援団体）と接触を持つことにためらいを持ちながらも、誠意で接してくださった院長の言葉には誇張や嘘は感じられなかった。この時点で、被災中心地の玉樹に行くべきかどうかの判断を下す必要があった。個人的には是が非とも行きたかったが、先遣隊の本来の目的である「本隊の派遣有無の決定」からすると行かずともNOであり、他の2名の同行者にも涙をのんでもらい帰国となった。今後中国は他の先進国と同様に、支援対象としては慎重に考慮する国であると考えられる。

いずれの活動も、派遣される隊員はもちろんその家族や、本部での後方支援者、派遣元の各施設の職員などの多大なる協力の上に成り立つことを再確認させていただけた。

チリ地震の派遣に際して

河内　順
（チリ本隊隊長、湘南鎌倉総合病院、医師）

私はヒューマニズムを表に出すのは苦手なので、戦略面を述べたいと思います。隊長として求められることは①全員無事故で帰国すること②NPOとして活動を形にすることでした。そのためにはどこで、どんな形態の活動をするのか、という最初の判断が重要になります。災害医療活動というのはまず現地に入ることを優先するため、そのような判断は現地に行ってから行います。通常先遣隊が需要を調査し、必要であれば本隊を呼ぶという手順を踏みますが今回の被災地は地球の真裏のチリであり移動に時間がかかるため迅速な対応が難しいと判断、そのまま診療できる人材、機材をそろえてチームを編成しました。逆に言うと∧ここまでそろえて何もしないで帰ることは避けたい∨というプレッシャーは今回のように診療機能をもった先遣隊には常に付きまとうわけです。今回も現地着後に死者数が下方修正され、1月のハイチ地震と違い倒壊なインフラの破壊もなく、需要があるかどうかも不明でした。訪問したコンセプシオンコンスティトゥシオンなどテレビで出てくるような街は一見被害はひどく見えるのですが、よく見てみると一部の建物被害だけであったり、また街は津波で破壊されていても「避難が迅速であり人的被害は振無であったり、という状況でした。ただ海岸沿いには家を失った人々がAYUDA（助けて）という看板を掲げ水や食料を求めて散在していました。

最初はコンセプシオンに診療所を開設しようと思ったのですが治安が悪く戒厳令がひかれてもそのような雰囲気ではありませんでした。海岸沿いの津波被害があったようないくつかの小さな町にはサンティアゴの医科大学のボランティアや軍がすでに診療所を開いていました。いくつかの病院を視察しましたが現在のところ特別困っていることはないとのことでした。この時点で①移動診療所を開設する②食料、水をサンティアゴで仕入れ、配るなどを考慮し始めました。しかし最後にカウケネスという内陸の、報道されない町の公立病院を視察すると、建物は半壊し、院長からは是非来てほしい、今夜から働いてほしい、との要請を受け、ここに人的物的資源を投入することを決定しました。

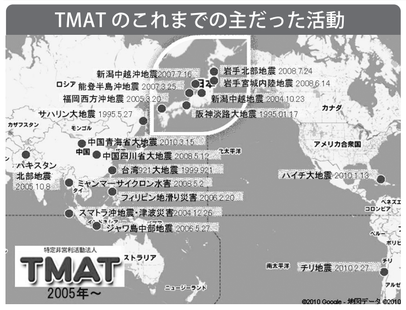
この時点で私の役割は8割方終了です。明確の結果ERの外傷処置並びに看護を受け持つことになりました。隊員は厳しい気候、続く余震の中、良く働いてくれました。体調を崩しかけた隊員も数名いましたが重篤なものはなく、無事に帰国することができました。

海外での災害医療活動というものは一般に思われているよりかなり地味です。自分たちの生活や、現地、他国のチームとのすれ違いなど、診療以外の苦労の方が多いものです。また我々のようなNGOは、JMTDRと違い、日本政府や現地大使館の協力もありません。しかし今回のように現地病院の一部となって働くような活動の成果は柔軟性の高い小規模な、しかし経験のあるNGOであるが故のものであると思います。

最後に震災で犠牲となったチリの方々のご冥福をお祈りいたします。

病院の信頼を得て手術を担当

TMAT のこれまでの主だった活動



～チリ地震 TMAT 活動略歴～

崩壊した街

2月27日午前3時34分（日本時間27日午後3時34分）南米チリ共和国でマグニチュード（M）8・8の地震があり、国内では大きな人的、物的被害が出ていると報じられた。TMAT事務局も情報収集活動開始。現地の空港が閉鎖されているとの情報。

3月1日　チリ政府の発表を受け、先遣隊を兼ねた本隊の派遣準備を開始するも、現地空港が閉鎖中の為出発見送り。

3月2日　サンチアゴの空港解除の情報が入り、同日の派遣を決定。米国ダラス経由でサンチアゴへ。

3月4日　被害が甚大と報道されているコンセプシオンへ向かうも、被害は小さく、他の被災地を視察する旨決定した。

3月5日　津波被害を受けたコンスティトゥシオンへ向かうも同地の被害は小さい。カウケネスという町の被害が深刻との情報を得、その町へ。同地は被害甚大であるが報道されていない為、十分な医療支援が届いておらず同地の Hospital San Juan Dios Cauquenes を拠点に医療活動を開始した。

3月8日　町が復興に向かっている状況を確認し、3月10日をもって今回の支援活動を終了する旨決定した。

3月9日　他の町へ調査チームを派遣。医療支援を必要としている所は見られなかった。

3月10日　医療支援活動を終了。サンチアゴへ移動し翌日チリを出発。3月13日日本に帰国し本隊は解散した。

チリ地震　本　隊

河内　順	隊長・医師	瀬戸美佐子	看護師	事務局	
高力　俊策	医　師	濱田　達也	看護師	橋爪　慶人	医　師
石道　基典	医　師	板脇　典子	看護師	原野　和芳	医　師
飯高　一信	医　師	佐藤　昌則	事務職	野口　幸洋	管理栄養士
		上原　仁	事務職	高橋　淳	看護師

チリ大地震医療救援隊に参加して

板脇　典子（チリ本隊隊員、四街道徳洲会病院、看護師）

私は2月27日に起きたチリ大地震に医療救援隊として参加しました。

救援隊としての活動はもちろん、災害現場に行くのも初めてのことで不安でいっぱいでした。ハイチ地震の後だったこともあり、写真で見た阪神大震災で聞いたハイチの状況を頭に浮かべながらチリに到着しました。空港の建物は閉鎖されており人国審査や預けた荷物を受け取るのもすべて人手のような状況が益々不安にさせます。しかし空港内部サンティアゴの街を見ると大都会で崩れた建物もなく、とても大地震のあった場所とは思えません。チリはお災害慣れ豊富で南米の国々をそうで、途一国での医療援助というのもとは違ったものになりそうな様子でした。

到着した翌日から活動場所を探しに震源地近くの街や津波の被害にあった街へ向かいました。それまでの道路もひびが入っていたり、橋が壊れていたりと、地震の爪痕が見られます。実際に津波の被害にあった街は海岸線から何十メートルも離れた場所まで砂が打ち上げられ、家も倒壊しています。その様子は自然災害の恐ろしさを物語っており言葉では言い表せない気持ちになりました。そのような中でも人々が明るく復興に向けて頑張っている姿に胸をうたれました。私たちは震源地に近いカウケネスという街の病院で活動を開始しました。病院の建物の半分は地震で倒壊しており通常120床あるところ40床しか稼働していません。40床中10床ほどはもともと救急外来の待合室のホールにベッドを置いている状態でした。スタッフも地震の為と疲弊している状態でましてや彼らも被災者です。そこで私たちはスタッフを助け病院が通常通りの業務ができるようにサポートすることが主な仕事です。

病棟の様子なども見ることができないかと考えましたが、看護という仕事はその国の生活習慣や医療体制によって様々な形をとるので介入するのが特に難しい仕事です。チリの看護、生活習慣について知識がないうえに、言葉の壁があればなおさら誤解を招きかねない結果になってしまいかねません。スタッフは患者の数や病状に対して十分足りており、そのなかに割って入ることが良いことなのかどうか、彼らの仕事を取り上げてまで何かをする必要性があるのか疑問でした。そこで私たち看護師は救急外来に来る患者さん達のバイタルサインを測定し診察後に書き込むという仕事をしました。次から次へとくる患者さんのバイタルを測定している間、現地のスタッフは時間をかけて処置ができたり、他の仕事をすることができたりします。

今回のように病院で現地のスタッフとともに働くというケースだと災害医療と国際協力というつの面があり、その狭間でどうしたらよいかと考えさせられました。実際来院する患者さんはほとんどが科科疾患の患者さんでした。地震のストレスによる腹痛やめまいを訴える人が多く、また地震の後の後片付けをしていてガラスで手足を切った人や、釘を踏んでしまったという人も多く来院していました。血圧を測っている間など患者さんがいろいろ話かけてくるのですが、言葉が通じず残念に思いました。中には毎日来る患者さんが顔を覚えてくれるようになんとなく通じているような思いにもなりました。時間があるときは子供の患者さんに折り紙を折ってあげたりすると大喜びで「折り紙はどこにいても絶えさえあれば人を喜ばせることができる」という言葉を思い出し日本文化の素晴らしさを実感しました。

今回が初めての参加でまだまだやれることがあったのではないかと考えることが多かったのですが、病院に来た患者さんやその家族、街の人々、空港ですれ違った人々に感謝の言葉をもらうと少し晴れ晴れとした気持ちになりました。今回の経験を今後に活かしていきたいと思います。

板脇看護師と幼児患者（チリ地震）

通訳としての思い出

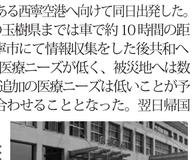
蔡　光鎬
（中国青海省先遣隊通訳、四街道徳洲会病院 職員）

今年4月14日、中国青海省玉樹チベット族自治州玉樹県にて大地震が発生したとの情報を受けTMATでは先遣隊派遣について協議が始まり、中国に詳しく、中国語ができる為、私は通訳として先遣隊に同行しました。先遣隊の役割は現地で情報収集し、それを分析して今後の活動の判断を下すことです。今回、隊長田川豊秋医師とコーディネーター野口幸洋氏は早く正しい情報を得るために過密なスケジュールの上、標高3700mを超える悪条件の中で集中的に情報を収集し、分析した結果、医療支援本隊の派遣を見送ることと決定しました。

今回本隊の派遣は見送られましたが、中国の複数の病院を訪れた際《TMATだけがここまで来てくれました》と何度も言われ、TMATの迅速且つ積極的な活動は被災地域で感謝されていると実感するとともに、我々の活動は職場や地域の方々の御協力によりささえられていることを再認識しました。

今回通訳として先遣隊に参加し活動をしながら深く感じた事があります。地球上にいつ、どこで、どんな災害が起こるか予測することは極めて難しく、また地球にはいろんな言葉を持つ民族が生存しています。災害が起きた際、被災地に世界各地からお支援隊がくる、そこで最初にしなければならないのが言葉でコミュニケーションを取る事です。言葉が通じないと緊急事態にもかかわらず、情報を入手するのに時間がかかるのはもちろんのこと、状況を正しく理解し、的確に判断できない事がたくさんあります。特に命にかかわる治療には正確なやりとりが大切です。

今後より高い質でTMATの活動をする為のTMATの会員皆様は出来るだけ一つ以上の外国語やその国の少数民族言葉を覚えてほしいと思いました。


西寧市内の病院と大勢の医療スタッフ

中国青海省地震 TMAT 活動略歴

4月14日　中国青海省玉樹チベット族自治州玉樹県で14日午前7時49分（日本時間 同8時49分）、マグニチュード（M）7.1 の地震が発生し、多数の死者及び負傷者が出る。TMAT 事務局 情報収集開始。

4月15日　死傷者数が増加していくとの報道を受け、TMAT 先遣隊の派遣を決定した。機能している空港の中で被災地に最寄りである西寧空港へ向けて同日出発した。

4月16日　先遣隊現地に到着。西寧市から被災地の玉樹県までは車で約 10 時間の距離で、途中に共和という町がある。西寧市にて情報収集をした後共和へ移動し同地を視察。西寧市及び共和では医療ニーズが低く、被災地へは数多くの救援隊が向かった為、被災地でも追加の医療ニーズは低いことが予想される。結果今回は本隊の派遣を見合わせることとなった。翌日帰国し調査活動を終了した。

中国青海省玉樹県地震　先遣隊

田川　豊秋　隊長・医師　野口　幸洋 管理栄養士
蔡　　光鎬　通訳・事務職
事務局
猪俣　森太郎　TMAT事務局

～ハイチ震災応援レポート～　清水 徹郎（ハイチ第2陣隊長、札幌徳洲会病院 救急診療部長）

1月22日　現地到着。第1陣田川先生から活動拠点のハイチアンコミュニティホスピタルを案内される。既に活動中のNYとスウェーデンのボランティアチームからガイダンスを受けた後近くのTMAT宿泊地に入る。ここは孤児院を経営する裕福な婦人の庭を提供して頂いた。地震の恐怖からご家族は外で寝泊まりしていた。日本との連絡はイリジウムとインマルサットが頼りであった。

1月23日　OCHAチャーターのバスで病院到着、駐車場10箇所あったハイチの病院の内4箇所は完全に崩壊していたとのことである。早速トリアージされた軽傷の患者を診察した。現地語（クレオール語）と英語を話すボランティアが通訳として活躍していた。創縫合後の必要のある患者が少なからず見られた。病院には多数のボランティア人員が配置されており麻酔科・整形外科医が不眠不休で手術を行っていた。院外のテントでは内科的疾患（特に小児症例）が多く我々も手伝った。院内では術後の心肺停止症例にモニター、VF（心室細動）未確認のまま3回の電気ショックをしていた。また私は気道確保を担当、明確の無い患者が多かった。

1月24日　この日は近隣クリニックに医師派遣の要請があり4日前に駆虫薬を飲ませた子供が便と共に数十匹の回虫を排泄。若い男性看護師は初めて目にする回虫の群れにショックを受けていた。院内は患者、ボランティア、家族、医療関係者で収拾が付かなくなり各人の役割が分かる様ゼッケンを付けることにした。病院入り口はショットガンで武装したガードマンが出入りをチェックしていた。夜の食事は豪華具材入りインスタントラーメン、管理栄養士に感謝する。深夜2発の銃声を聞いた。治安維持のためのものか、それとも…。

1月25日　引き続き多忙を極める。四股切断適応患者、腹部外傷の後遺症、深部膿瘍の疑い等複数の患者が訪れるが病院の超音波診断装置は使い物にならず、CTも無く、せめて携帯用の超音波装置があればと思われる。なお治安維持の為アメリカ大使館をキューバ軍が守るという世にも珍しい光景もあった。

1月26日　第3陣が到着。引き継ぎの後市街地の視察を行った。住宅は石灰岩を積み上げただけである。被害の少なかった富裕層地区でも瓦礫の下には死体が放置されたままで漂う尿臭とゴミの散乱は雨期には入ると感染症が懸念される。病院に戻るとTMATにも手術を担当してくれとNYチームから要請があり、信頼感が出てきたと感じられた。（27日は帰国日となった）

感　想

①　隊員間の連絡がとれなくなった時間が一時あり、お互いの通信手段を2重、3重に確保しておく必要を感じた。

②　ハイチ等の不十分な医療体制の地域では患者が外国人であっても海外医療救護チームに依存する可能性が高い。

③　創の密封閉鎖療法（ラップフィルム使用）は、特に火傷や浅い外傷に効果的だが世界標準になっておらず、他国から批判された。又小児のガーゼ交換で子供が泣きわめくと米国ナースはセルビス拘束に拘った。国柄の違いを実感した。最後に派遣の機会を与えてくださった徳洲会グループの方々に感謝を表したい。